

～毎週即日お受け取り可能～

オンラインスピード発行承り中!

セゾン・アメリカン・エキスプレス・カード

[Click Here](#)

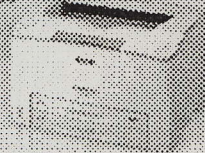
[トップ](#)
[会員登録\(メール配信\)・変更](#)
[年間購読申込/購読お届先変更](#)
[ご利用ガイド](#)
[よくある質問](#)
[ご意見・お問い合わせ](#)
[サイトマップ](#)

2003.07.07 更新

ENGLISH

新製品・新サービス

セイコーエプソン、
モノクロレーザープリンター
「LP-6100」
を発売



- ① シンガポール航空
2倍マイルプレゼント
- ② IT基本データ2003
早期割引実施中!



サイト内検索

-
- ① 発行号で検索する
 - ② 過去の雑誌記事検索
 - ③ 公開連動企画
 - ④ ビジネス世論
 - ⑤ 広告リンク&資料請求

ウェブスペシャル

- ① 上海時報
- ② 経営の情識
- ③ 新製品うらおもて
- ④ 世界の街角から
- ⑤ ニュースを読む眼
- ⑥ 郵政道場
- ⑦ 「信長」を読み解く
- ⑧ 「惑星が行く」をたどる

本誌連動企画

- ① ランキング
- ② アンケート
- ③ データベース
- ④ スペシャルインタビュー

連載・ライブラリー

- ① 田村賢司の
「順張り逆張り」
- ② 谷口智彦の
On the Globe
「地球鳥瞰」

本格的に動き始めた



2003.07.09
「米出版界の野茂」は日経ビジネス元記者

「週刊文春」7月10日号おしまいのモノクログラビアページに、栗本薫、江國香織、北方謙三、鈴木光司の人気作家4人が集まって、なごやかに納まった写真が載っています。「さて共通点は?」とキャプションがあって、答えは見出しの「私たち、アメリカの新人作家です」。それぞれの作品がこのほど英語になってアメリカで一斉に発売されたというので、記念に文春編集部でスナップとあいなった次第のよう。

でも誰もが持つだろう疑問、「それにしてもこの人たちの本、なんで急にアメリカで出るの、どこのどんな出版社が出してくれるの、一度に4冊も日本の本を」という問いにこの記事は答えていません。「ニューヨークのパーティカル社」と文中あるだけで、あとはさっぱり。答えて差し上げましょう。それは元日経ビジネス記者、わたくしの隣に座っていたこともある酒井弘樹氏が起こした会社なのであります。

氏は当時の編集長の計らいで、初めて日本経済新聞出版部からの出向でやってきた人でした。そういう人事は彼の後にも先にもありません。記事は書いたことなし。しかし既に数冊ベストセラーを作り、出版界では名の通った腕利き編集者でした。弊誌の人気コラム「敗軍の将、兵を語る」を担当し、楽しそうに仕事をしているのを見て、教えられたり、驚かされたりしたものです。

▼「敗軍の将」でマクナマラに会った

他人の失敗談を書こうというのだから下手をすると非礼になりがちなコラムの性格を踏まえて、酒井氏はいつも取材に先立って、自筆の丁寧な手紙を書き取材候補の相手に送っていました。その手紙を味気ない社用箋に書くのでは失礼だからと、自分であつらえた和紙の便箋と揃いの封筒を作ったもんです。その残りはまだ我が編集部があり、今でも重宝しています。

現場記者が斬る

現場記者が斬るTopへ

谷口智彦の「地球鳥瞰」
バックナンバー

執筆：谷口 智彦

- ★ 降旗淳平の「メディア探訪」
- ★ 寺山正一の「産業夜話」
- ★ 取材ノート
- ★ eビジネス特集
- ★ No.1サイト集
- ★ ビジネスライター作法
- ★ 戦後史略年表
- ★ 便利な図表集

次代を担う
ビジネスパーソンへ

Associé

詳しくはこちらへ

日経ビジネスの本
新刊発売中

全11タイトル
好評発売中!!

詳細はこちら

産業立地特集

産業

ISO・環境分野の
強力な
パートナー探しなら

ISO・環境

NikkeiBP
NETWORK

BizTech
Nikkei BP Network

驚かされたのは、彼が担当者として最後に選んだ「敗軍の将」でありました。何とそれは、ケネディ、ジョンソン両政権の国防長官として、ベトナム戦争を指揮したロバート・マクナマラ氏だったからです。当時、回顧録が出版されたばかりで、これを逃してはこんな大物を「敗軍の将」欄で扱えるチャンスは二度と来ないと彼は思ったのでした。勇んでアメリカに、彼の飛んで行くまいことか。

英語はさっぱりできませんでした。しかし怖いものがないのがエライ編集者のエライところです。友達を頼ればいいのを知っているからです。ここらへんに、記者と編集者の違いがあるかもしれません。友達を徹底的に仕事に生かしていくのが、少なくとも僕には彼が身をもって教えてくれた編集者像でありました。この時も彼は、マクナマラ氏と交友がありアポまで代わりに入れてくれた年長の友人を通訳代わりに使って、難なくやり遂げたものです。

その時かもう少し後か、ワシントンかニューヨークを歩いていた時、彼、愛媛産のカントリーボーイは、ある病気に感染してしまいます。アメリカの、あれはもう風土病というしかありません。

▼アメリカで伝染病にかかった

創業熱、という病気です。ここで会社を起こしたい、という。

日本には、英語にしてアメリカ人に読まれるべき書籍が山ほどある。それをこっちで、つまりアメリカで、本にして出すのが自分の仕事なんじゃないか…。この熱に取りつかれた彼は、自分の英語ができるかどうかには、全く考慮を払いませんでした。今はきっと随分使えるようになったでしょう。しかしあの時の彼が、コトバごときで全く躊躇しなかったことだけは確かです。もっとやりたい、ハードコアの何かがあったので。

きっぱり日経社員を辞めました。日経BP社で契約社員にしてもらい、それを最後の命綱に、周囲があれよあれよと言う間にさっそうと（といっても目の輝きを除けばどこにでもいそうな、婚期を逃したただの独身男ですが）マンハッタンの人とあいなったのです（命綱は後に彼自身で切りました）。

正直言って紆余曲折、石の上にもナントヤラの苦節がしばらく続きました。最初に撃つ弾は日本の経営書と考えていたけれど、日本企業に対する関心が1990年代前

半までと打って変わって、米国では今や陰の極であります。子供の絵本ならいいだろうか、何にしよう…。

▼次々起きた「奇跡」の出会い

しかし奇跡のようなことが起きます。ある学者の紹介で、ギリシャ系アメリカ人にして、神戸育ちの関西弁男という妙な青年が、彼の前に現れました。経歴が妙なら、頭の中は出身校のプリンストン大学教授がもっとあきれくらい、いやいい意味です、素晴らしい人物でありました。博士論文さえ書き上げたらすぐにでもプリンストンでComp Lit、つまり比較文学の教授にしてやるとオファーが来ているのに、アカデミアの出世競争を毛嫌いし一顧だにしてくれないという男でした。

これで酒井氏は、願ってもない武器を手に入れました。第一この降って湧いたような同僚は、カネなんか要らない、好きな本が読め、好きな日本の本が英語になるならそれでいいというタイプです。

そして批評眼は折り紙つき。日本語の本でアメリカ人に受けるのは何であって、何ではないかを彼はよく分かります。もっと大事なことには、上がってきた英訳の良し悪しを、一目で見分ける能力があります。

ギリシャ系らしく黒髪に黒髭をたくわえ、酒井氏を指して「ホンマこのおっちゃん人脈広いさかいに」と関西弁でしゃべるこの人物に一度会ったことがあります。一種偏執的な、米国の競争社会で生きていけないタイプの男かと内心うたぐっていたわたくしの心配は、会って氷解しました。言っている内容に嘘偽りが無いことは、相対した時の誠実さである程度直感できるからです。

これで終わりません。超有名なエディトリアルデザイナーが、装丁から何から全部やってやろうと言ってきたのです。何でもこの人が、1冊も業績のないバーティカルやという版元に一肌脱ぐんだと知ったニューヨークの業界雀たちは、しきりに首をひねったのだとか。業界紙の話題にまでなりました。そうこうするうちもう1人、ハーバード・ロースクールを出てニューヨークで弁護士登録、大手ローファームでパートナーへの道まっしぐらと思われていた白人青年が、ひょんなことから働きたいとやってきます。

自分のやりたかったのはやはり文学絡みの仕事だったと自覚したこの青年は、学部を過ごしたプリンストン（ニューヨークからクルマで1時間です）に恩師を訪ねます。「どないでっしゃろ」。そしたら先生が、「お

お、そやったら、オマエの先輩のあいつがあっこにおるがな」と、例のギリシャ系青年に釣られて関西弁になってしまいました、ともあれ酒井氏のくだんの同僚のところはどうかと、勧めてくれたのであります。この時の恩師に、パーティカル社がまだ儲けのない会社だという認識はどうやらなかったようだし、弁護士青年もそこを気にしなかったというのが愉快なところですよ。

で、ここに知的財産権管理と契約交渉のプロが労せずして獲得できました。年収はもちろん、ローファーム当時と比較するのすらおこがましいというもんです。

▼アメリカ人が手塚治虫と会う日

ここから先はみなさん、想像してみてください。ハリウッド映画「リング」のDVD版発売に合わせ、全米の本屋にコウジ・スズキの原作が並んだ姿を。カオリ・エクニの『きらきらひかる』が『Twinkle Twinkle』という題名で、どっさり平積みになっているところを（それにしてもTwinkle, twinkleと来ればlittle starだ。いい英訳ですねえ）。

そして酒井氏の本には、今までアメリカ人が一度も見なかったものが見ついています。それは「腰巻」（帯）。日本の出版文化が育ててきた腰巻が、これまでそういうものを持たなかったアメリカに初めてお目見えするのです。製本所にその技術がないから、1冊ずつ手で巻くんだと酒井氏は言うておりました。

パイプラインには次作、次々作が待ち構えています。その1つが手塚治虫の長編漫画『ブッダ』。どうやら人と出会う天才らしい酒井氏は、ブッダ翻訳を既に終え、縦書きを横書きに、右開きを左開きにするという煩わしい変換さえパソコン上で終えていたという熱狂的手塚ファンアメリカ人に出会い、原稿を確保しているのです。

それをハードカバーのどこから見ても大人の読書人が手に取ってみたいくなる装丁にして、本屋へ流すと酒井氏は言うておりました。もしかしたらこれを機会にアメリカ人は日本の漫画、それも手塚漫画と初めて本格的な出会いを遂げ、コミックは子供のものである子供だけのものという偏見を少し正してみたいかなるかもしれないのです。

▼戦後58年、アメリカとつき合った結果

出来上がった素晴らしい装丁の本どもは、ニッポン

の本でございますという顔を全くしておりません。多くの読者はそれが日本のお話だと知らずに手に取ることでしょう。そして読み終えたら、日本に感心せず、著者のストーリーテリングにひたすら感心する、それでいいではありませんか。

日本文化の普及という高尚な目的を掲げ採算度外視で続けてきた一部大手出版社や文部科学省肝いりの同種の事業が例外なく鳴かず飛ばずで終わったのを尻目に、いま酒井氏の、徒手空拳始めた会社の本が、ただの本としての良さ美しさだけを武器としてそれら前例が届かなかった先へ飛んでいこうとしています。快拳というほかない。出版界の野茂投手です、ヒロキ・サカイは。

日本経済が米国にとって恐れるに足らない存在となり、その日本へ寄せる関心が急速に冷える中、野茂英雄氏はアメリカの野球場へ球を放りに行きました。今酒井氏は、アメリカ人の心へ直球を投げ込もうと走り出している。こういうパイオニアたちの力で日本とアメリカがハートでつながるのは、戦後58年、伊達にわれわれアメリカと取っ組んできたわけじゃなかったとも思わせてくれるから、うれしいじゃありませんか。

(酒井弘樹氏の会社の[サイト](#)へ行くと、「ブッダ」の表紙、山田太一本の表紙も見られます)

(谷口 智彦)

現場記者が斬るTopへ

谷口智彦の「地球鳥瞰」
バックナンバー

[このページの最初へ戻る](#) | [このページを印刷する](#) | [ご意見・お問い合わせ](#)

当サイトの記事・写真・図表などの無断転載を禁止。Copyright(c) 2001-2003 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved. [個人情報ポリシー](#) [リンクポリシー](#)